

# THE MASQUE OF THE RED DEATH

—恐怖と虚構—

小泉和弘

## THE MASQUE OF THE RED DEATH

—Horror and Fiction—

Kazuhiro Koizumi

### はじめに

Poe の作品のなかでも *THE MASQUE OF THE RED DEATH* は、稀代の傑作とされている。では、なぜそれほど優れた作品なのか。その疑問をこの論文では、少しでも新しい視野に立って解明しようとする試みを目的としている。特に、この小説では、「赤死病」というこの世には存在しない架空の疫病により、読者を恐怖に落とし入れるのであるが、読者はなぜ実在しないような疫病によってそれほど恐れ戦かねばならないのかといった、読者の側に立った、文学受容の理論を重視して論を進めていくことにしたい。そういった批評の方法がより現実側に立った、机上の空論にならぬ批評であると筆者は信じるからである。

### I

Poe は、彼自身の小説理論を持っており、その理論を一生貫いた作家である。つまり、小説は現在ある現実をありのまま写すものではなく、現実を忘れさせてくれる一種の興奮状態を作りあげることであるとしている。そのために、彼は読者に対して一種の魔術をかけているのである。魔術をかけられた読者は、それほど長い時間はその魔力にかかっているはずがない。人間の緊張は、それほど長く続かないのだから、小説は短編に限るというのが彼の理論である。そして、小説では冒頭が大切であり、特に第一文が良くなければその小説は無意味になるというのである。つまり、読者は冒頭がおもしろくなければ、それ以降を読み進まないからである。

確かに、Poe の小説の冒頭には、興味深いものが多くあるのでここで少し例を取り出して検討することにしよう。

Nil sapientiae odiosius acumine nimio.—Seneca<sup>1)</sup>

この文は、*THE PURLOINED LETTER* の冒頭であるが、「知恵にとって鋭敏すぎることは憎むべきものはない」という、セネカの書いたラテン語である。Poe の主張するように、この一文さえ読めば読者はこの小説全体がどのような内容か、ある程度想像できるのであるから、冒頭としては成功と言えるかもしれない。しかし、ラテン語で書かれた文を読める人がどれくらい居るのだろうか。また、注釈を付けたのでは、最初から注釈を読まねばならないような小説は興醒めてしまう。同様に、哲学者の文を冒頭に持ってきたのが、*A DESENT INTO THE MAELSTRÖM* である。

The way of God in Nature, as in Providence, are not as our ways; nor are the models that we frame in any way commensurate to the vastness, profundity, and unsearchableness of His works, *which have a depth in them greater than the well of Democritus.*

—Joseph Glanville<sup>2)</sup>

この文は、「神のやりかたは摂理においてもそうだが、自然のうちにおいても、われわれのやりかたとは異なっている。またわれわれが形づくる雛型は、神の業の広大さ、深遠さ、不可測さに比すればとうてい同日の談ではない。まことは神の業はデモクリタスの井戸よりも深い」という意味だが、自然の神秘、恐怖といったこの小説の主題を的確に捕らえている。しかし、独創性を第一に考えている Poe に にとって、冒頭を他人の文章の引用では、いくら効果があったとしても、興味は半減してしまう。

For the most wild yet most homely narrative which I am about to pen, I neither expect nor solicit belief. Mad indeed would I be to expect it, in a case where my every senses reject their own evidence. Yet, mad am I not—and very surely do I not dream. But to-morrow I die, and to-day I would unburden my soul. My immediate purpose is to place before the world, plainly, succinctly, and without comment, a series of mere household events.<sup>3)</sup>

この文は、*THE BLACK CAT* の冒頭であるが、この小説がどんな小説なのか、どうして主人公は明日死ぬことになるのか、読者に興味を持たせるよう主人公自身がナレーターとなり、独白という形式で Poe の暗い世界に読者を導き込むのに成功し

## THE MASQUE OF THE RED DEATH

ている。いきなり、黒猫が登場して来ないのも、この小説の特長である。ここまで調べてきた冒頭は、2種類に分類することができる。*THE PURLOINED LETTER* と *A DESCENT INTO THE MAELSTRÖM* のように、他人の引用を最初に用いたものと、*THE BLACK CAT* のように、Poe 自身の言葉で書かれたものである。*THE MASQUE OF THE RED DEATH* は後者に属するわけである。ここで詳しくこの小説の冒頭を考えてみよう。

The "Red Death" had long devastated the country. No pestilence had ever been so fatal, or so hideous. Blood was its Avatar and its seal — the redness and the horror of blood. There were sharp pains, and sudden dizziness, and then profuse bleeding at the pores, with dissolution. The scarlet stains upon the body and especially upon the face of the victim, were the pest ban which shut him out from the aid and from the sympathy of his fellow-men. And the whole seizure, progress, and termination of the disease, were the incidents of half an hour.<sup>4)</sup>

「黒猫」と違い、この小説は、「Red Dead」の説明から始まる。いきなり、ありもしない、架空の疫病である「赤死病」を冒頭に持って来ることにより、Poe は読者に最初からショックを与え、彼独特の異様怪奇な、幻想の世界に飛び込ませようとしているのである。この第1パラグラフを丁寧に読むと、場面の設定があまり成されていないのに気が付く。いったいこの小説の場所はどこなのだろうか。山の中なのか、海の近くなのか、都会なのかということが全くわからない。また、時代は中世なのか、それとも現代なのかということもわからない。前者に関しては第2パラグラフで、プロスペロ公の領内ということはわかるが、その領地はどういう場所なのか見当も付かない。後者にいたっては、最後まで何の説明もなく、読者の想像だけに任されている。読者の読み方により何通りにも読めるわけで傑作の条件はまずここにあると言える。次に、このパラグラフでは、「赤死病」の症状と経過を克明に書かれているが、そのことにより読者を不安に陥れる手法が読み取れる。不吉な語である death, fatal, dissolution を使い、この小説に出てくる登場人物は、きっと死に致るだろうということを読者に印象づけ、これらの語は死の伏線になっていると言える。また、ここで注意しておかねばならないことは、このパラグラフでは登場人物がまだ誰も出てこないことである。例えば、日本の昔話である桃太郎では、「昔々あるところに、おじいさんと、おばあさんが住んでいました」となっているように、最初に登場人物が出て

くるのが普通である。登場人物は、第2パラグラフで初めて出てくるのであるが、登場人物より前に「赤死病」の説明をしたところに、この小説の巧みさがあると言える。つまり、人物がどうなったかと言うよりも、「赤死病」という疫病がどうなるのかということに、読者の視点を向けさせたことが、この小説を成功に導いていると言える。人よりも実体の掴みにくい疫病に重きを置いたことにより、読者を幽玄な世界に引きずり込んで行くのである。目に見えぬ者への不安といった効果を、Poeは熟知していたのである。

## II

この章では、色彩のイメージに関して考察することにしよう。題名に色彩が出て来るのは、*THE BLACK CAT* と *THE MASQUE OF THE RED DEATH* の2つで、前者は黒を用いて暗い陰惨なイメージを、後者は鮮やかな血のイメージを読者に与えている。

前章で検討した冒頭部に、「赤死病」の説明として、—the redness and the horror of blood. とあるように、「赤死病」の赤は血液の色の赤なのである。赤という色の具体的なイメージとして、青年男子は、「血」を連想する<sup>5)</sup>のであるから、特に説明がなかったとしても、この小説は血に塗られた不気味な小説であることは、読者には容易に想像できるはずである。

また、「赤死病」の特長として、scarlet stains がある。この scarlet は、罪をイメージする色であり<sup>6)</sup>、人からの救いとか同情から見放された疫病であることをPoeは色彩のイメージを用いて表わしている。

この冒頭部分の他に、色彩のイメージが現われるのは、仮装舞踏会の催される7つの部屋である。このことに関して、2つの論文が既にあるので、まず井上氏の論文から検討することにしよう。

七色と言えは我々の脳裏に自然に浮かぶのは虹のスペクトルであろうが、その中の何色が排除されて白がそれに取って替ったのかと考えれば、プロスペロウが採らなかった唯一の単色が黄である事が分かる。．．．ポオにとって黄色の世界は停滞し、腐敗して汚物の様に悪臭を放って居る現実を意味する。．．．プロスペロウの僧院に黄色の部屋が無いのは彼が逃れて来たのが抑黄色の世界だからである。「赤死病」の荒れ狂う“external world”は黄色が象徴する忌むらしい現実であり、僧院の中は夢の世界—夢想の可能な世界—なのである”。

この論文では、7色というتماず虹を想い出し、この小説と虹のスペクトルとの色の違いは、黄色が白に置き換えているとしている。Poe がこの小説で描いた7つの部屋の色は、順番に blue, purple, green, orange, white, violet, black であり、虹の色は、赤・橙・黄・緑・青・藍・すみれ色である。以上からわかるように、Poe の描いた色彩のうち white と black が虹の色の黄と藍に置き換えられているのであるから、井上氏の見解と少し異なることになる。また、Poe の世界は幻想の世界であり、夢の世界なのだから虹の色彩と合致するということを井上氏は論文で書いているが、必ず人間は色つきの夢を見るとは限らないことは、次の資料であきらかである。

昔から色つきの夢を見る人は天才か精神異常者だという俗説がある。最近の調査によれば、画家、デザイナーなど色彩に関係の深い職業についている人に、色つきの夢を見る人が多いと報告されている。さらに松本らが、大学生約1000名を対象に調査したところ、色つきの夢を見る人が理科系の学生で50%、文科系学生では46.9%であった。男女別では、女子で62.1%、男子が43.1%が色つきの夢を見たことがあり、理科・文科の比率の差は男女ともほぼ同様であった<sup>8)</sup>。

つまり、夢の世界の色彩と虹の世界の色彩が合致すると言っても、約半数の人が色つきの夢を見ないのだから、すべての人が納得がいく説明とは言えないであろう。また、虹の色彩が夢の世界と必ずしも結びつかないのではないだろうか。

虹に対する認識は諸民族によって一定していない。虹は一種の自然現象であって、世界中どこでも虹の現象には本質的な差異がないが、虹をいかに考えるかは、かならずしも一定していない。．．．東南アジアでは、アッサム地方のセマ・ナガ族は虹を「神霊の橋」とし、アンガミ・ナガ族も虹を神の用いる通路としている。．．．ベンガル湾東部のネグリト系のアンダマン群島民は、虹を死者の世界との間にまたがる杖とみなし、死者がこの世にやってくるときはこの虹を伝わってくるといい、虹を不吉な兆し、病気の前兆と考えている。．．．ギリシア神話の女神イリスは虹の神で、天と地、神々と人間を結ぶとされ、神々の使者とされている<sup>9)</sup>。

以上の資料でわかるように、虹は神の渡る橋とか、死者がこの世に伝わって来る杖とか病気の兆しと思われる。つまり、この小説の場合、7つの色彩の部屋は「赤死病」の前兆であり、死の世界に渡る架橋であると考えたほうが、より自然な解釈なのではないだろうか。また、井上氏の論文で、黄色は現実の象徴であるという論法は、

十分納得でき、すばらしい着眼であるといえるが、僧院の中の世界が夢の世界であり、その外が赤死病が荒れ狂う現実の世界であるという論法には異議がある。「赤死病」自体、僧院自体、この小説自体が Poe の場合、現実にはありえぬ架空の、夢の世界なのだから、この小説全体が夢の世界であり、読者が住んでいるのが現実の世界なのである。読者が小説を読んでいる最中は夢の世界に入り込んでいるのであり、読み終えた瞬間現実の世界に帰るのである。そういったことを Poe は目論んでいるのである。

次に、宗和氏の論文を考察してみることにしよう。

舞踏会場の各部屋には、各々、異なった色調—青、紫、緑、橙、白、堇、黒に真紅—が与えられている。東端の部屋の青は夜明けの色であり、始まりを示し、西端の部屋の黒は夜の色で、終りを示すことを考えると、ここには、初めから終りへの時間的推移が暗示されていることは明らかである。Prospero が最後に謎の人物を追って青から黒に向かって駆け抜けることになる七つの部屋は、誕生から死までの人間の一生の七つの時代を表わし、Prospero は、その間の時間の流れを一挙に駆け抜けたと言える<sup>10)</sup>。

大まかな論理において賛成であると言えるが、一生の間の七つの時代と色彩との関わりがあまり詳しく述べられていないのが残念である。青は夜明けの色とあるが、青で夜明けを連想する人は少数なのではないか。青は海を連想する<sup>11)</sup>場合が多く、海はすべての生命の源と考えられているので、人間の誕生と考えた方が自然である。7つの部屋の色彩と人間の誕生から死までを当てはめると、blue が誕生、purple が幼年、green が少年、orange が青年、white が壮年、violet が老年、black が死となり、purple が幼年であることを除いて説明が付く。誕生は既に述べたが、green は若さを象徴し<sup>12)</sup>、少年期を表わし、orange は熱の象徴で情欲・結婚を表わすので青年期に相当し<sup>13)</sup>、white は不健康のイメージなので壮年期を表わし<sup>14)</sup>、violet は、薄暮のことで現代生活において人々が疲れた足を家路へ運ぶ時刻を象徴するので老年期に匹敵し<sup>15)</sup>、black は死を連想する<sup>16)</sup>ものである。

この小説で、色彩語が用いられているのは、今まで見てきたように冒頭部と7つの部屋の色に関して、7つ目の部屋の窓ガラスに関してである。次の文は、その窓ガラスの説明である。

### THE MASQUE OF THE RED DEATH

The panes here were scarlet — a deep blood color.<sup>17)</sup>

ここで用いている scarlet は、冒頭で「赤死病」の説明の時使われた色であり、仮装舞踏会に赤死病が広がることを読者に連想させ非常に大きな効果をあげている。

### III

この章では、不安から恐怖への移行について考察する。まず、不安と恐怖の違いについて考えてみることにしよう。

恐怖と不安は血つづきである。不安の方は恐怖の血を水でうすめて量をふやしたようになっているので、感情のつよさはうすらいでいるかわりに、恐怖よりもながくつづく。それから恐怖の方は何がおそろしいという対象がはっきりしているが、不安では不安の対象が漠然としたものだったり、さだまった対象がなくて不安だけが宙にただよっていたりする<sup>18)</sup>。

資料から分かるように、「赤死病」という対象がはっきりしているので恐怖なのだが、その疫病がいつ伝染するのかわからないということを考慮に入れると、冒頭では「赤死病」への不安を読者に訴えていることになる。不安な状態が小説の初めから最後まで続くことは、読者にとっては耐えられぬことである。そこで、僧院への逃難が考えられたのである。外の世界と隔絶してしまえば、その中に居れば安心なわけで、読者に一瞬の安堵を与えるのである。しかし、外から誰も入れないということは、内から誰も出られないということを意味するのであり、もし「赤死病」が入り込んだら逃げられないのである。不安が再び読者を襲うのである。不安は、舞踏会でなぞの人物が登場し、その人物を Prospero 公が第7の部屋、黒の部屋まで追い掛けて行くまで続く。そして、その仮装人物が Prospero 公に面と向きなると、Prospero 公は死んでしまう場面で、読者は「赤死病」の登場を確信し、一気に恐怖のどん底へと陥るのである。読者のずっと続いた緊張と不安は、恐怖という形に変わり小説の終焉を迎えるのである。最後のパラグラフは、その後の「赤死病」に関して書かれている。この部分は冒頭と似ており、静かに始まり、激しく展開し、静かに終わっていくという、静・動・静の小説技法が用いられている。この技法は、静かなだけでは読者は飽きてしまうし、激しいだけでも同様である。読者を常に物語に釘付けにする有効な手段と言える。

結 び

Poe の小説の場合、まず注意すべきは冒頭である。この小説では、「赤死病」の説明によって、将来襲って来るだろう「赤死病」を読者に印象づけさせ、その不安を「赤死病」の登場まで持続させるのである。

また、7つの部屋の色彩は、人間の誕生から死亡までを象徴するものであり、大時計が時を告げる音と共に、「赤死病」は7つの部屋を駆け巡り、読者の抱いていた不安は恐怖へと急変する。誰も入ろうとしない黒い部屋に、Prospero 公がなぞの仮装人物を追い駆けて入ることにより、すべてが死の世界に落ちて行く。「黒猫」でも同様だが、Poe にとって黒というのは死を象徴する色彩で重要である。

最後に、この小説の分量に関してであるが、読者の不安と緊張が持続するのは限度があるのだから、これぐらいの長さで丁度良いと思う。一気に読み通せる分量を、Poe は計算に入れて書いているのだから、こう感じる読者は、彼の術中に陥ってしまったことになるのである。

註

- 1) Poe, *The Complete Tales And Poems of Edgar Allan Poe* (New York: The Modern Library, 1965), p. 208.
- 2) Ibid., p. 127.
- 3) Ibid., p. 223.
- 4) Ibid., p. 269.
- 5) 西田虎一「心彩心理学」(造形社, 1979), p. 80.
- 6) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*. 山下主一郎他共訳 (大修館書店, 1984), p. 551.
- 7) 井上晴彦「暗黒の世界」—「赤死病の仮装舞踏会」研究— 福岡大学人文論叢 Vol. 8, No. 1. 1976, pp. 9-10.
- 8) 大百科事典 (平凡社), 15巻, p. 82.
- 9) 日本大百科全書 (小学館), 17巻, pp. 695-696.
- 10) 宗和美江 "The Masque of the Red Death" —閉じられた空間への ambivalence— 人文論究 第33巻第3号, 1983, p. 81.
- 11) 西田虎一, p. 80.
- 12) Vries, p. 298.
- 13) Ibid., p. 472.
- 14) フランシス・J・クディラ+羽鳥博愛著 英語発想辞典 (朝日出版社, 1984), p. 92.
- 15) Vries, p. 671.
- 16) クディラ, p. 73.



*THE MASQUE OF THE RED DEATH*

17) Poe, p. 270.

18) 島崎敏樹「感情の世界」(岩波書店, 1966), pp. 98-99,

(こいずみ かずひろ)